第 80 回国民スポーツ大会　サッカー競技（少年男子）　参加報告

兵庫県サッカー協会　2 級審判員　小林顯太

目次

1. はじめに
2. 大会概要
3. 大会テーマ
4. 事前勉強会
5. 担当試合
6. 大会中研修会
7. 最後に



1. はじめに

10 月 10 日から 10 月 13 日の 4 日間にわたり、青森県八戸市にて開催された「第 80 回国民スポーツ大会　サッカー競技（少年男子)」の参加報告をいたします。本大会の参加にあたり、ご推薦いただいた皆様や日頃よりご支援いただいている関係者の皆様に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

2. 大会概要

大　　会：第 80 回国民スポーツ大会　サッカー競技（少年男子）
開催期間：2026 年 10 月 10 日（土）～2026 年 10 月 14 日（水）
会　　場：プライフーズスタジアム・八戸市東運動公園陸上競技場・八戸市南郷陸上競技場

3. 大会テーマ

審判チームの連携によるフェアで安心・安全、そして円滑な試合運営の実現

＜期待したい効果・結果＞
・4 局面の連続性（トランジション）とチーム戦術の意図を理解したレフェリング
・次のプレー（局面×球際）を見据えたポジショニングと争点把握
・予測に基づく一貫性のある判定とゲームマネジメント

4. 事前勉強会

2026 年 9 月 15 日、オンラインにて本大会の事前勉強会が開催されました。勉強会では、大会要項や大会テーマの共有に加え、2026-27 年サッカー競技規則の改正内容についての具体的な解説が行われました。また、注意事項として、全国大会で発生しやすいミス（公式記録の確認漏れや交代に関するエラー）への注意喚起のほか、「報連相」の徹底と独断での行動を慎むこと、SNS の適切な利用について説明がありました。あわせて、全国大会に参加する審判員としてふさわしい身だしなみ（髭・髪の色・ファッションタトゥーなど）を徹底するよう指導を受けました。

5. 担当試合

＜1 回戦＞
日時：2026 年 10 月 10 日（土）10：00 kickoff
会場：八戸市南郷陸上競技場
対戦：佐賀県 － 秋田県
割当：主審 小林顯太 / 副審 熊田颯氏・板谷恭平氏 / 第 4 審 山崎智貴氏
　　インストラクター 髙橋寿氏

【振り返り】
〇良かった点
・アドバンテージ
試合中に複数回のアドバンテージを適用しましたが、どれも効果的であったとインストラクターの髙橋氏より高い評価をいただきました。直前のプリンスリーグでは、攻撃側競技者の前方のスペースのみを見てしまい、チーム全体の攻撃の矢印や意図を想像できず、効果的に適用できないという課題がありました。本試合はその反省を活かし、チームの攻撃の方向性や「何がしたいのか」を意識することで、適切なアドバンテージの適用に繋げることができました。

・ホールディングの判定基準
直前の関西学生リーグ 3 部の試合では、ホールディングを許さない姿勢が強すぎるあまり、ごく軽微な接触まで反則として取る場面があったことが反省点でした。本試合では、その経験を活かし、反則を許さない毅然とした姿勢は保ちつつも、全体のゲームバランスを意識することで、グレーゾーンの多いホールディングに対しても精度の高い判定ができたと考えています。

・動きとポジショニング
これまでの兵庫県内での研修会等で学んだことを活かし、予測の質を高め、細かなポジション修正を繰り返しました。その結果、中盤で巻き込まれることなく、試合展開にマッチしたポジショニングを取り続けることができ、この点についても髙橋氏から高い評価をいただきました。

〇課題点

・警告を未然に防ぐマネジメント

52 分に佐賀県 8 番の選手へラフプレーで警告を出しましたが、その 1 分前に同じ選手が相手競技者を引き倒す反則を行っていました。ファウルの直後に競技者の交代があったため注意ができませんでしたが、この時点で効果的なマネジメントができていれば、その後の警告は防げたかもしれないと反省しています。

・注意の簡潔さと判定基準の調整

前半 12 分、秋田県 3 番の選手に対し、直前のホールディングの反則（アドバンテージ適用後）について注意を行いました。しかし、注意の時間が長くなってしまったため、「シンプル・ショート・クリア」を意識したマネジメントを行うべきでした。また、注意後も同じ選手が相手競技者に対して、手を使ったチャレンジを続けていたため、髙橋氏より「一度注意をしたのだから、反則を抑止するために、影響度の軽い接触であっても基準を下げて笛を吹くべきだったのではないか」との助言をいただきました。

・副審との協力（オフサイド）

オフサイドの場面で、副審 1 のフラッグアップに合わせて笛を吹きプレーを停止しましたが、その間に GK がボールをキャッチしていました。副審は GK と FW の接触リスクを考慮してフラッグを上げましたが、主審としては状況を冷静に見極め、笛を吹いて止めるのではなくフラッグアップをキャンセルし、プレーを継続させるべきでした。髙橋氏からも指摘をいただき、今後の改善に繋げていきます。





写真：1 回戦のコイントス

＜2 回戦＞

日時：2026 年 10 月 11 日（日）12：20 kickoff

会場：プライフーズスタジアム

対戦：千葉県 － 長野県

割当：主審 久保沢透大氏 / 副審 小林顯太・千田慶祐氏 / 第 4 審 板谷恭平氏

インストラクター 平石暁史氏

【振り返り】

〇良かった点

オフサイドの見極めやファウルサポートなどにおいて、主審を適切にサポートすることができました。この点については、インストラクターの平石氏からも良い評価をいただきました。

○課題点

試合中、A1 サイドのベンチ前での競り合いにおいて、FW の選手が相手競技者の下に潜り込み、DF の選手が高い位置から落下するという危険なボディトリップの反則がありました。本来であれば FW の選手に対して注意が必要な場面でした。しかし、直後に DF の負傷によりメディカルスタッフが入り、審判団（主審・副審 1・第 4 の審判員）で「1 分間フィールドを離れさせること」の確認を行いました。さらに、今大会では再交代が認められていたため、当該 DF がそのまま交代するなど、複数の事象が立て続けに発生しました。このように複数の事象が重なり、主審の認知負荷が高くなったことで、反則を行った競技者への注意が抜け落ちてしまいました。副審 1 としては状況を把握し、主審に対して注意を忘れていることを伝達してサポートするべきでした。平石氏からも同様の指摘をいただいたため、今後の課題とします。

＜準々決勝＞

日時：2026 年 10 月 12 日（月）13：10 kickoff

会場：八戸市南郷陸上競技場

対戦：鹿児島県 － 神奈川県

割当：主審 久保沢透大氏 / 副審 小林顯太・菅原陽平氏 / 第 4 審 田中日出紀氏

インストラクター 平石暁史氏

【振り返り】

○良かった点

前試合に引き続き、副審前での事象（ハンドやトリップなど）に対する的確なファウルサポートを含め、全体的に主審をしっかりとサポートすることができました。この点については、インストラクターの平石氏からも良い評価をいただきました。

○課題点

本試合の課題は副審としてのベンチコントロールです。試合中、主審からの見え方とベンチ・副審側からの見え方が異なるシーンがありました。その際、ベンチと良好な関係を保ちつつ主審の判定をサポートするようなコミュニケーションを取ることができず、結果としてベンチからの審判団に対する信頼を低下させてしまったと反省しています。見え方にギャップが生じた際にも、審判団への信頼を損なわずに主審を守れるようなコミュニケーションの取り方が今後の大きな課題です。

＜準決勝＞

日時：2026 年 10 月 13 日（火）11：00 kickoff

会場：プライフーズスタジアム

対戦：岡山県 － 青森県

割当：主審 小林顯太 / 副審 斎藤雅也氏・宮崎樹氏 / 第 4 審 加藤優太氏

インストラクター 髙橋寿氏

【振り返り】
〇良かった点
・動きとポジショニング
　全体的な動きの量と質について、JFA 審判マネージャーの泉氏より良い評価をいただきました。試合展開の予測に基づくポジショニングの修正を繰り返し、争点と適切な距離を保つことができました。また、前日の全体ミーティングで「ロングボールからのカウンターで GK と FW が 1 対 1（ファウルが起きれば DOGSO となる場面）」の映像研修を行っていましたが、同様の展開が本試合でも発生しました。結果的にファウルは起きませんでしたが、研修での学びを即座に実践し、争点から大きく離されることなく判定することができました。

・ファウルの判定
　ファウルの判定において、事象の結果を見てから判断するのではなく「即断・即決」を貫けた点について、泉氏より高い評価をいただきました。即断・即決を徹底したことでプレーの結果に引きずられて判定がブレることがなく、終始一貫した基準で試合をコントロールすることができました。この点については、今後も継続していきたいと考えています。

〇課題点
・オフサイドのフラッグアップの見落とし
　前半 8 分、副審のオフサイドのフラッグアップに即座に気づくことができず、数秒遅れて笛を吹き、オフサイドの反則を採用しプレーを再開するシーンがありました。前半の早い段階での見落としや反応の遅れは、ベンチや両チームに対してレフェリーへの不信感や良くない印象を与えかねない事象であったと反省しています。今後は、オフサイドへの気づきや副審とのアイコンタクトの頻度を向上させる必要があると考えています。

・ゲーム全体の流れを考慮した懲戒罰の判断
　64 分に第 4 の審判員の前でアウトオブプレー（青森県のスローイン）となった際、岡山県 2 番の選手が保持していたボールを相手競技者に向けて投げた行為が、試合にとってリスペクトに欠けるものであったと判断し、反スポーツ的行為で警告しました。しかし、インストラクターの髙橋氏からは「行為に対しての対応（マネジメント）は必要だが、警告は厳しいように見える。素早くボールを渡して再開させようとした際のコントロールミスのように見えた。」との指摘をいただきました。今後は、目の前の事象だけを切り取って判断するのではなく、ゲーム全体の文脈や選手の意図を冷静に汲み取り、適切なマネジメントができるように努めたいと考えています。

・ペナルティーエリア付近での動きとポジショニング
　1 点目の得点シーンやその直前のプレーにおいて、セオリーである R サイドではなく、A2 サイドに移動してプレーを監視しました。その結果、得点シーンでは R サイドへのクロスに対して争点から大きく離されてしまいました。プレーの流れの中で R サイドへポジションを修正するチャンスはあったため、今後は基本のセオリーを意識し、常に適切な距離・角度から監視できるように、動きとポジショニングの精度を高めていきます。



写真：準決勝の選手および審判団の整列

6. 大会中研修会

＜大会前日＞

大会前日の研修会では、大会テーマの実現に向けた「挨拶」と「チームワーク（協力）」について説明がありました。挨拶については、両チームに対してだけでなく、競技役員や大会役員の皆様に対しても積極的に行い、良い第一印象を与えることの大切さを改めて学びました。また、チームワークに関しては、2026-27 年の競技規則改正や再交代の適用に伴う第 4 の審判員のタスクの増加について共有がありました。交代ボードの表示のタイミングや複数人の交代に伴うエラーが発生した場合でも、主審は決して焦ることなく、平常心を保って審判団で協力し、冷静に対処することの重要性を学びました。

＜大会 1 日目＞

各会場での共有事項の報告があり、それらを通じて、審判団における事前の打ち合わせの重要性を学びました。

・ゴールエリア内からの直接フリーキック再開時における遅延行為での警告

ゴールエリア内からの直接フリーキックで再開する場面において、交代が行われました。その後のプレー再開時に、GK に対して遅延行為で警告するという事象がありました。審判団は競技規則を正しく適用していましたが、チーム側が 2026-27 年の競技規則改正（ゴールキックのカウント）と勘違いし、競技者やベンチが不満や疑問を抱く結果となりました。インストラクターからは、チームが何を誤解しているかを審判団で察知し、ベンチに対して副審 1 や第 4 の審判員がどう対応するかを事前に打ち合わせておくことが重要だと指導を受けました。また主審は、自身の判定が正しいからこそ毅然とした態度を取り、キャプテンオンリーを適用してボディーランゲージを交えながらルールを説明する姿を周囲に示すべきであったとアドバイスをいただきました。チームや観客等に「レフェリーが間違っている」という誤った印象を与えず、ルールの伝達者としての信頼と地位を保つ冷静なマネジメントの重要性を学びました。

・交代時のリスタートの管理と制限時間付き交代

スローインでプレーが停止し、交代（5 秒のカウント）が行われている際、残り 2 秒の時点でスローワーが勘違いしてボールを投げ入れてしまう事象がありました。この時、交代して退く競技者が競技のフィールド中央にいたため、10 秒以内に競技のフィールドを離れることができないと判断し、交代要員がフィールドに入ることを認めませんでした。このような事象は、副審がスローワーに対して再開を待つように伝えることや、主審からスローワーへ明確に交代することを伝えるなど、審判団の連携と事前の打ち合わせによって防ぐことができます。試合をスムーズに進行させるための細かな予防的なマネジメントの重要性を学びました。

＜大会 2 日目＞

各会場での共有事項の報告があり、それらを通じて、円滑な試合運営における時間管理（タイムマネジメント）の重要性を学びました。

ハーフタイム明けの試合開始前のルーティン（円陣やハイタッチなど）が長引き、後半のキックオフ時間が 10 数秒遅れてしまう事象の報告がありました。この遅れを未然に防ぐために審判団として何ができるかについてディスカッションが行われ、具体策として、ベンチや選手に対してこまめにカウントダウン（3 分前、2 分前、1 分前、30 秒前など）を行うことや、ロッカーが遠い場合にはロッカーアウトの笛のタイミングを早めること、両チームのキャプテンにキックオフまでの時間を伝えて協力を促すことなどが挙げられました。また、時間が切迫している場合には円陣を省略するように伝えるなど、状況に応じた柔軟な工夫ができるという意見も出ました。これらの対応を適切に行うためには、チームが円陣を組んでポジションにつくまでにどのくらいの時間（約 1 分半など）が必要なのか、審判員自身が正確なタイム感を持っておくことの重要性を学びました。

＜大会 3 日目＞

各会場での共有事項の報告があり、ベンチコントロールや予測に基づくポジショニングについて学びました。

・副審 1 および第 4 の審判員によるベンチコントロール

ファウルの判定に対してベンチから疑問や不満が出た際の対応について共有がありました。判定の是非についてベンチとやり取りするのではなく、主審とは角度や見え方が異なることを伝えるベンチコントロールが効果的であると学びました。副審 1 や第 4 の審判員の見解が主審の判定と異なっていたとしても、見え方の違いを理由にコミュニケーションを取ることで、主審の判定を支持しつつ、ベンチと良好な関係を維持するマネジメント手法を学ぶことができました。

・予測に基づく的確なポジショニング

映像を用いて、DF のボールロストやロングボールから GK と 1 対 1 となり、DOGSO になり得る事象の 2 シーンについて共有がありました。このような場面において、どのようにして争点により近い距離で的確に判定することができるのかについてディスカッションを行いました。プレーの結果を見てから動くのではなく、状況を見極め、ボールをロストするかもしれないという危機意識を持ち、次の展開に備えたポジション修正を行うことが非常に重要であると学びました。

7. 最後に

今大会では、国民スポーツ大会の準決勝という大きな舞台で主審を担当させていただきました。強い緊張感もありましたが、無事に試合を終えることができた経験は、今後の審判活動における大きな自信となりました。

試合を通じては、効果的なアドバンテージの適用や事象に対する「即断・即決」、そして試合展開の予測に基づく的確なポジショニングといった部分で確かな手応えを感じることができました。一方で、主審としてはゲーム全体の文脈を汲み取ったマネジメントなどに課題が残りました。また副審としては、複数の事象が重なった際の主審への的確なサポートやベンチコントロールの難しさに直面し、今後の課題を見つけることができました。

ピッチ外における他地域の審判員との交流は、これらの課題と向き合うための大きな収穫となりました。先輩の審判員からは、試合を無事に終わらせるためのマネジメントについて教わり、非常に多くの学びを得ました。また、別の審判員とは審判活動における共通の悩みを打ち明け合い、それぞれの課題に対してどのように向き合い、取り組んでいるかを共有できたことで、自分にはなかった新たな視点を得ることができました。

大会を通じて、審判団の協力や事前の打ち合わせの重要性、そして挨拶や身だしなみといった審判員としての基本的な姿勢も改めて認識しました。今回の貴重な経験や学びを糧とし、関西や兵庫県のサッカーに少しでも還元できるよう、日々精進してまいります。

最後になりますが、このような素晴らしい大会に推薦していただいた関西サッカー協会、日頃よりお世話になっております兵庫県サッカー協会および北播磨サッカー協会の皆様、そして大会を円滑に運営していただいた青森県サッカー協会をはじめとするすべての大会関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。